

カリキュラム・教科書・アセスメントコンポーネント

ニュースレター (第14回)

ジョイント・コーディネーション・コミッティ (JCC) 会議、無事終了!

JICA 側とミャンマー教育省側の両者で CREATE の基本方針を話し合う JCC 会議が 2015 年 8 月 27 日 (木) ネピドーで開催されました。今回の JCC 会議の目的は、CREATE 開始前に両国間で結ばれた協力内容及び計画を現状に合わせて改訂すること、これまでの業務進捗状況を共有すること、今後の円滑なプロジェクト実施のために必要な事項を確認することでした。ミャンマー側からは教育省次官、ミャンマー教育研究局 (DMER) 局長、教師教育研修局 (DTET) 局長、ミャンマー試験局 (DME) 局長をはじめ、それぞれの部局の職員、日本側からは JICA 本部の松山職員、JICA ミャンマー事務所の池田所員、山川専門家、CREATE のメンバーと現地スタッフの総勢 40 名でした。

最終的には本会議で予定していた議題はすべて話し合え、一定の成果はあったのですが、会議の直前まで予想外の出来事が頻発し、ハラハラの連続でした。というのは、会議の 2 日前になって突然、教育省から日程変更の連絡があり、それに伴いすでに予約していたフライトや宿泊、通訳備上などをすべてやり直すことになり、プロジェクト事務所は 2 日間大わらわでした。さらに悪いことに、当日早朝のヤンゴンーネピドー間のフライトが大幅に遅れ、一時、「本日の会議ができないかも...」という不安が空港で待機していた CREATE のメンバーの間に広がりました。結果としては、3 時間遅れでネピドーに到着したにも関わらず、教育省の柔軟な対応によって無事、開催できたのですが、直前になってこれほど突発事項が重なったのは、私の長い経験の中でも非常に珍しいことです。兎に角、無事に終わり「ホッ」としているところです。CREATE の皆さんの頑張りに感謝、感謝!



(上) JCC 会議の様子、(下) JICA 本部松山職員と教育省次官 Dr. Soe Win の署名交換、後ろに立っているのはミャンマー教育研究局局長 Dr. Khine Mye

アセスメント・セミナー、小学校の先生方、熱心に耳を傾ける!

2015 年 8 月 19 日 (水) ダイヤモンド・ジュビリー・ホールにおいて、第 2 回目のアセスメント・セミナーが開催されました。このセミナーは今年 3 月に行われた第 1 回目続くもので、前回のミャンマーにおける新しいアセスメントのあり方についての議論を引き継ぎ、特に今回は、より具体的な各学校における児童の学習成果の評価に焦点を当てた議論が行われました。

ご存じのように、同国の学校では「学校規定」によって、チャプター・エンド・テスト（Chapter End Test：単元末試験）を年間7回実施することが決められており、このテスト結果は進級や進学において大きな意味をもっています。ただ、試験内容が教科書の記述を暗記していれば容易に解答できるものとなっており、この結果だけからは児童が本当に学習内容を理解したのか、また当該単元で定められた学習目標を達成したのか、については判断ができないという指摘がありました。同時に、試験結果ばかりに注目が集まり、その結果を有効に活用して児童の学習過程や教師の授業実践のあり方を見直すという本来意図

されていた形成的評価の目的が見失われているという鋭い指摘も出されていました。そこで、ミャンマー政府は今回の教育改革の一環として、アセスメントのあり方自体も見直していこうとしています。特に、初等教育においてはこのチャプター・エンド・テストの見直しが大きな課題となっています。

今回のセミナーでは、CREATE で作成したばかりの「試験問題作成ガイドライン（案）」（適切なチャプター・エンド・テストの作成方法を解説した手引書）の内容共有とそれについての意見交換、さらに同ガイドラインの手順に沿った具体的なチャプター・エンド・テスト問題の作成ワークショップを行いました。参加者は、教育省の職員をはじめ、ヤンゴン地区の小学校の先生方など総勢70名でしたが、皆さん、熱心に耳を傾けられ、新しいアセスメントのあり方についての知識を吸収されていたようです。また、午後からの試験問題作成ワークショップでは、新しい教科書（ドラフト版）を見ながら、いろいろと試行錯誤を繰り返されていました。特に、これまで Co-Curriculum として「評価しなくてよい」とされてきた「体育」や「芸術」などの実技教科については、「何を評価するのか」といった基本的なことから考えていく必要があり、「評価を行う」ということ自体が大きなチャレンジとなっているようでした。



村瀬専門家（アセスメント担当）によるガイドラインについての説明



試験問題作成ワークショップにおいてCDTの指導のもとで問題を作成する参加者たち

教師教育セミナーの開催

2015年8月20日（木）～21日（金）、CREATE 主催の教師教育セミナーがダイヤモンド・ジュビリー・ホールにて、教育省教師教育訓練局（DTET）のスタッフはじめ、全国の教員養成校の校長や先生方を招いて開催されました。セミナーの内容は、新しいカリキュラムで目指されている「全人教育」を前面に押し出し、全人教育のための教師教育、教師の資質能力開発といった大きなテーマから、教員養成校のカリキュラム改訂の方向性、新しいアセスメントの考え方といった具体的なものまでが議

論されました。日本からは、CREATE メンバーである加藤総括、増田専門家、小野専門家をはじめ、本セミナーのために鳴門教育大学の梅津正美副学長にお越しいただき発表をしていただきました。また、教師教育チームのミャンマー・カウンターパートも積極的な役割を果たし、参加者がお互いに意見交換をしたり、議論したりしやすいようにアドバイスやファシリテーションを効果的に行っていました。

サンプル教科書、ようやく出来上がる！

各教科 CDT の努力はもちろんのこと、CREATE の専門家の皆さんの多大なご協力と支援もあって、ようやく各教科の小学 1 年生の教科書が出来上がりつつあります。そこで、この度、教育省に新しい教科書についての具体的なイメージをもってもらうために「英語」(頁数の多い教科の例として)、「音楽」(頁数の少ない教科の例として)の 2 教科について「サンプル教科書」を作成しました。サンプル教科書の作成においては、教育出版の細川専門家を中心に、加藤総括、宮原専門家及び私も参加して、ミャンマー印刷協会及び業者の責任者の方々と 7 月中旬から頻りに話し合いを重ねてきました。

このサンプル教科書によって、新しい教科書の具体的なイメージ(大きさや厚み、重さなど)がある程度つかめるようにはなったのですが、実際に印刷業者から納入されたものには「裏抜け」や「落丁」が数多く見られ、また冊子によって印刷の質がかなり異なるという(日本の)常識では考えられないようなことが起こっています。同国の印刷技術と質管理の低さに改めて驚かされています。

各教科の小学 1 年生教科書の頁数(案)

教科名	頁数	教科名	頁数
ミャンマー語	162	道徳公民	88
英語	144	体育	80
算数	194	ライフスキル	90
理科	130	音楽	39
社会	84	図画工作	46



教員養成校の校長をお招きしての夕食会

ご存じのように、CREATE ではカウンターパートとしてミャンマー教育省から多くの人材を提供してもらっています。彼らの所属先は教育省カリキュラム課、教員養成校、小中高等学校など様々ですが、その中でも特に教員養成校所属の方が多くを占めています(次頁の表参照)。

実は、このことが教員養成校の校長先生の「静かなる怒り」を買っていたようなのです。というのは、教員の多くがプロジェクトにとられ、教員養成校の授業運営が難しくなっているばかりか、プロジェクトに出した教員からは所属校に対し何の報告もなく、校長として部下の業務進捗を把握する責任が果たせない、というのです。

これは CREATE の責任というよりは、ミャンマー教育省が対処すべきことなのですが、あまりにも各校長の不満が大きいため、今回の教師教育セミナーで全国の教員養成校の校長が一堂にヤンゴンに会されたことを機会に、日頃からの協力に対する感謝とお礼を兼ねた夕食会を催しました。礼節を重んじるミャンマーの先生方だけあって、夕食会では日頃の不満を出されることなく、なごやかに歓談されていました。

CREATE としては、これを機会に教員養成校との関係が修復できることを願うばかりです。



ミャンマー・カウンターパートの所属先別人数 (2015年8月末時点)

	教育省 カリキュラム課	教員養成校	小中高等学校	合計
ミャンマー語	1	2	3	6
英語	2	1	1	4
算数	2	2	1	5
理科	1	2	1	4
社会	2	2	3	7
道徳・公民	1	1	1	3
体育	1	2	1	4
ライフスキル	2	0	2	4
音楽	1	1	2	4
図画工作	0	3	0	3
コンピュータ	3	0	0	3
教師教育	0	4	0	4
合計	17	20	15	52

文責: 田中義隆 (カリキュラム・チームリーダー)

編集: 宮原光 (プロジェクト・コーディネーター)